

蒼い影

アンドシュ・プロードル作陶展

Dans l'ombre bleue du ciel

会期：2017年3月1日（水）～7日（火）

最終日は午後五時閉場

会場：日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

## ごあいさつ

このたび、日本橋三越本店ではアンドシュ・プローデル氏の個展を開催いたします。

プローデル氏は、フランスで哲学と美学を修めた後、メキシコでの日本人陶芸家との出会いから茶の湯の世界に魅せられ、作陶の道に入りました。日本に脈々と受け継がれる楽焼の精神を研究・昇華し、独創的な作品を発表してきました。氏が窯をもつフランス・ルビニャックの美しい風土と、楽焼の美意識との邂逅から生まれた作品は、茶の湯の新しい可能性を湛え、力強く屹立しています。

本展では、新作約 100 点を展覧いたします。どうぞご高覧くださいますようご案内申し上げます。

日本橋三越本店

茶 碗

花 瓶

写 真

## DANS L'OMBRE BLEUE DU CIEL

Je porte en songe l'hiver et l'été  
les maisons séparées par des prés  
et dans son coeur sous l'écorce  
du chêne l'iris des marais.

Dans la salle un grand feu de cheminée  
comme dans les livres d'heures  
les pieds couverts de neige  
ou encore : on entre  
on met dehors le soleil de juillet  
vaste feu de bois de fleurs dorées  
le soleil cogne aux volets.

A la saison des cerisiers sans fleurs  
c'est le fruit et la mer  
qui mûrit  
s'échappe en fumées de mes doigts  
frêle respir emporté dans l'air des prairies  
encore une bouffée  
avant de s'endormir.

Dans l'escalier de la nuit large  
est un puits  
miroir à la frontière du sommeil  
tout s'y double et s'y noie  
bol, rose ou dahlia  
il faut suivre au-delà  
et sortir du nichoir.

Mais au réveil toute chose compte  
du chemin le tracé se révèle  
et dans le ciel en feu  
la route va plus loin que le conte.

Loubignac, septembre 2016

蒼い影

僕は冬と夏の夢を見る  
牧ばの中に離れて立つ家々  
樫の樹皮の下、心は野生のアイリス

中世の挿絵本にあるような  
部屋の暖炉にくべられた大きな炎  
雪まみれの足  
誰かが入ってきて  
7月の太陽を連れ出す  
金色の炎の花が広がる  
鎧戸がきらめいている

花のない桜の季節  
木の実や海が実る頃  
僕の指の間をこぼれさる煙  
牧ばの大気にかすかな息が消えてゆく  
もう一服  
眠りにつく前に

階段の向こうには夜の闇  
それは井戸の闇のよう  
眠りの境界線を映す鏡  
すべてが重なり、混ざり合う  
茶碗もバラもダリアも  
そこから出て行かなければ  
そして巣から旅立たなくては

だけど、目覚めた時にはすべてがわかる  
道しるべが遺されている  
燃える空の中  
おとぎ話より道は遠くに続いていく

ルビニャック 2016年9月





No.1 蒼い影  
楽焼  $\Phi$  13.1cm x (H)8.2cm



No.2 冬の夢  
穴窯  $\phi$  13.3cm x (H)8.5cm





No.3 夏の夢  
赤楽 φ 13.2cm x (H)9.6cm



No.4 牧ばの中に  
楽焼  $\phi$  15.2cm x (H)8.7cm



No.5 風と話す  
花瓶 Φ 38cm x (H)40cm



No.6 檜の心  
楽焼  $\Phi$  11.8cm x (H)10cm



No.7 7月の太陽  
楽焼 金彩  $\Phi$  14.2cm x (H)8.5cm



No.8 炎の花  
楽焼 金彩  $\Phi$  14.5cm x (H)8.5cm





No.9 空は近い

30 octobre, Loubignac (w)29 x (h)51cm



No.10 木の实  
赤楽  $\Phi$  13.8cm x (H)9.2cm





No.11 実る海  
楽焼 プラチナ  $\Phi$  13cm x (H)9.3cm



No.12 陰陽  
花瓶 Φ 39cm x (H)40cm



No.13 眠りにつく前に  
楽焼  $\Phi$  14.8cm x (H)8.3cm



No.14 向こうにあるもの  
楽焼  $\Phi$  14.9cm x (H)8.8cm



No.15 眠り  
楽焼  $\Phi$  14.4cm x (H)7.1cm





No.16 道

穴窯  $\Phi$  13cm x (H)7.5cm



No.17 掌を広げて  
花瓶 37cm x 24cm x (H)20cm



No.18 ほのかな  
赤楽  $\Phi$  13.3cm x (H)8.8cm





No.19 夢

楽焼  $\Phi$  14.5cm x (H)8.2cm

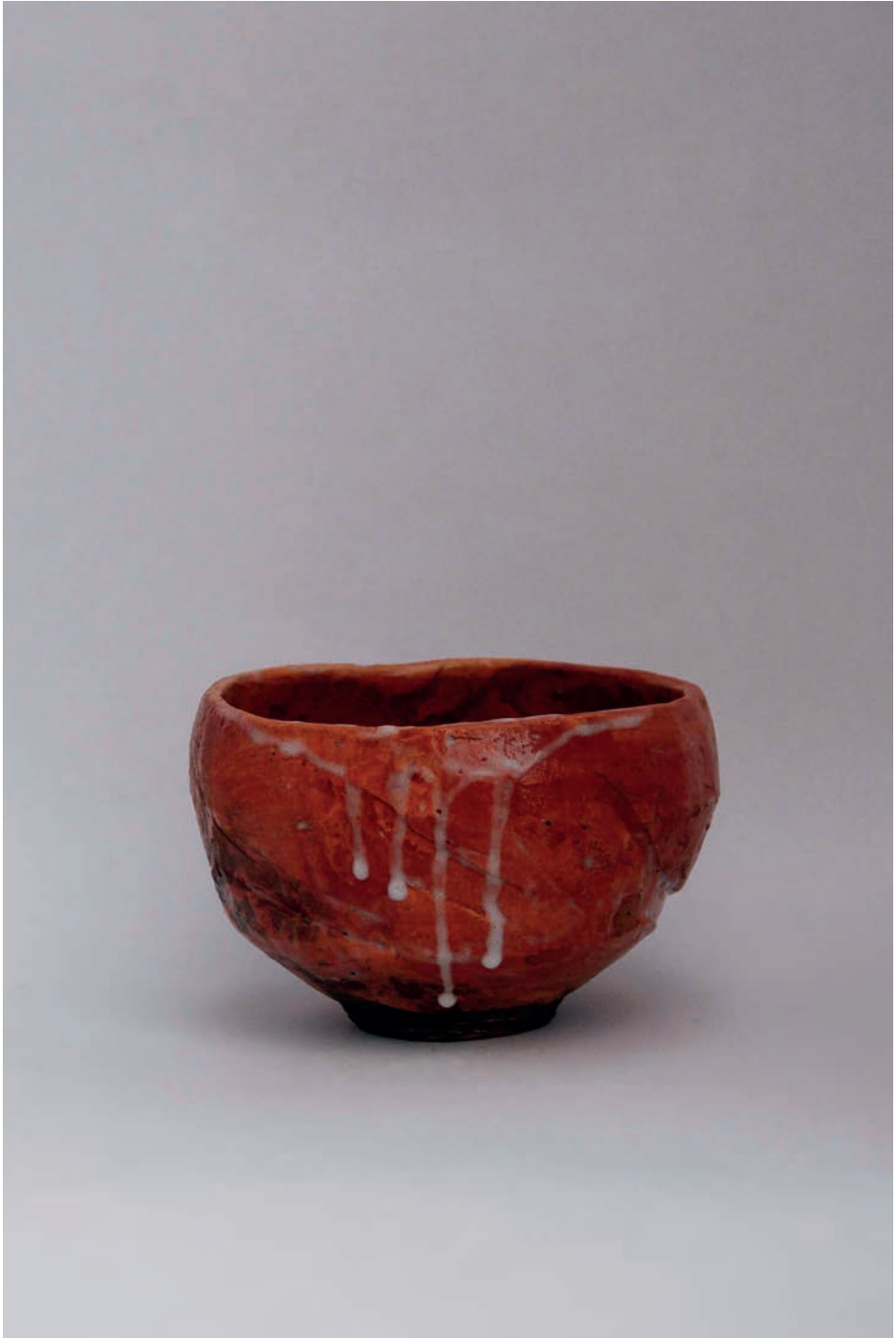


No.20 目覚め  
楽焼  $\Phi$  15.1cm x (H)8.6cm



No.21 雨の影

25 décembre, Loubignac (w)29 x (h)51 cm



No.22 道しるべ  
赤楽  $\Phi$  14cm x (H)9.1cm



No.23 夜の鏡  
黒楽  $\Phi$  13.2cm x (H)9.9cm



No.24 雪  
楽焼  $\Phi$  14cm x (H)9.5cm





No.25 日蝕  
花瓶  $\Phi$  41cm x (H)41cm



No.26 消えゆくもの  
楽焼  $\Phi$  14.5cm x (H)9.2cm





No.27 家に帰ろう

5 novembre, Loubignac (w)29 x (h)51cm



No.28 秋の道  
2 octobre. NIKKO (w)175 x (h)40cm

アンドシュ プローデル

1950年フランス南西、キュブラックで生まれる。ナンテール大学にて哲学/美学を専攻、博士号取得。1989年にメキシコのサンミゲルで陶芸の世界と出会い、長年続けてきた絵画を断念し、母の生家であるルビニャック村に穴窯と工房を作る。以来、日本での長期滞在を繰り返し、1995年の鯉江良二氏の工房を含め、いろいろな工房で作陶経験をする。

1999年京都日仏会館所属のヴィラ九条山に数ヶ月滞在し、「日本の陶芸 その起源から2001年」を執筆中に15代樂吉左衛門氏との交流を深める。その後、樂吉左衛門氏は2007年から2010年の4年間、毎年来仏し、ルビニャックで作陶。2010年に彼の滞在期間に作陶した作品群で佐川美術館、樂吉左衛門館で二人展を開催する。

フランスと日本において定期的に個展を開催し続けている。

国際アカデミー会員

パブリック コレクション

国立セーブル陶磁器美術館 フランス パリ / サルグミン美術館 フランス サルグミン / シドニーマイヤーズ基金 シェパルトン美術館 オーストラリア / 樂美術館 日本 京都 / ブルックリン美術館 米国 ブルックリン / サントドミンゴ現代美術館 サントドミンゴ / 佐川美術館 日本 滋賀  
島根県立教育委員会 / 岩手野外美術館 / 美濃教育委員会 / サンアンジェロファインアート美術館 米国 テキサス / アリアナ美術館 スイス ジュネーブ / 桑山美術館 日本 愛知 / ブルーノ リュサト学院 ベルギー ブリュッセル

